

# 性別や世代超え考える

## ひとZoomアップ

長久手市片平の愛知淑徳大シ  
エンター・女性学研究所。本棚  
には、ジェンダーや多様性に関  
する書籍約3千冊が並ぶ。同大  
心理学部教授の坂田陽子さん  
(55)は2020年7月から所長  
を務める。

同研究所は、1995年に女  
子大から男女共学化されるのに  
合わせ、94年に開設。女性の労  
働環境やライフイベントに関す  
る科目が多い女子教育のよさを  
保ちながら、性による差別や人  
権侵害について調査・研究し、  
男女共同参画社会の実現に役立  
てるのが目的だ。

坂田さんが所長になった年の  
12月、男だから、女だからとい  
った「典型(ステレオ)」的な  
考え方を「取り払う(リムー  
ブ)」ことを目指すステレオリ  
ムーブ課が発足した。それまで  
研究は教員中心だったが、全学  
生を対象に参加を呼びかけるの  
が大きな特徴だ。

合言葉は「学びを止める  
な」。当時はコロナ禍だっただ  
中。「大学の講義はオンライン  
中心で、学生の多くは引きこも  
りがちになっていた」と振り返

「性別を超えて適材適所で働けるように」と話す  
坂田さん=いずれも長久手市片平の愛知淑徳大で



る。「学部の枠組みを超え、学  
生が主体的に研究できる場を、  
提供したかった」

年に1回、新しいメンバーを  
募集し、現在は男性4人、女性  
7人の計11人の学生が所属。活  
動の日程や内容は、彼らが相談  
して決める。研究の成果は、年  
1回発行のニュースレターで報  
告。昨年からは、性別に関係な  
く着られる新しいジェンダーレ  
ス制服のデザインに取り組んで  
いる。

「研究所の規模が小さいから  
こそ、学生が疑問に感じる身近  
な問題を取り上げられる。次々  
に新しい企画が出てくる」と喜  
ぶ。そこには「男だから、女だか  
ら」といった雰囲気はなく、性  
や世代、国籍などの「違いを共に  
生きる」という同大の理念を実  
践できていると感ずるといふ。

さかた・ようこ 1968  
年、神戸市出身。2001年から  
愛知淑徳大で講師を務め、10年  
から同大心理学部教授。専門は  
生涯発達心理学。ジェンダー・  
女性学研究所では、学生相談窓  
口などとも連携。ジェンダーや  
性に関する学生の相談に乗る  
機会も多い。

「議論して出てきた意見を、  
形にして世に出すことが大切」  
と力を込める。「学生自身のモ  
チベーションになり、社会に出  
てから要求される自身の案を具  
体化することの練習にもなる。  
それを学生が学び取ってくれ  
ば」

出来上がったジェンダーレスの  
制服を着てミーティングをする  
坂田さん(右奥)と学生たち  
||  
ジェンター・女性学研究所提供



2023年9月14日(木) 中日新聞 名古屋東版16面  
この記事は中日新聞社の承諾を得て転載しています。